

文化財ニュース いわき

第 77 号

平成 27 年 05 月 25 日

(公財)いわき市教育文化事業団

福島県いわき市常磐藤原町手這50-1
(いわき市考古資料館内)

TEL 0246 (43) 0391

かみ や さく ごうふん 神谷作101号墳の発掘調査 てんかん はに わ ぜんほうこうえんぶん —天冠をつけた埴輪を出土した前方後円墳の調査—

【現地説明会 平成27年5月30日(土) 13時～15時】

神谷作101号墳は、いわき市平神谷作^{こしまき}字腰巻地内に所在します。本古墳は、海岸より直線距離で西方に約0.9kmの砂丘上に位置する神谷作古墳群(神谷作102・103・104・106・108号墳などで構成される)のうちのひとつです。昭和23年におこなわれた発掘調査では、多数の埴輪が出土し、このうち6世紀前半に比定されている「埴輪男子胡坐像」や「埴輪女子像」などが昭和33年に国の重要文化財に指定されました。

今回の発掘調査は、平成27年3月から重機による表土掘削工事をおこない、現在は手作業による精査をすすめ、5月末までに調査を完了する予定です。

調査の結果、大量の砂で覆われて判然としなかった古墳の形状は、前方後円墳であると確認され、その下方には溝が巡っていることがわかりました。また、墳丘斜面から溝にかけて^{えんとう}円筒埴輪や人物・馬などの^{けいしょう}形象埴輪の破片がまとまって出土しています。今回の発掘調査は、まさに当地方の古墳研究に重要な成果をもたらす結果となりました。



神谷作101号墳上空から太平洋を望む



北東から見た神谷作101号墳



墳丘面を検出しています



墳丘裾部を巡る溝の土層堆積状況

古墳について

本古墳の規模は、前方部の長さが10m以上、後円部の直径は約42mの規模を有する前方後円墳と推定されます。

墳丘は、砂丘の削り出しによって構築されています。墳丘の頂部および南側と西側は後世の削平により不明です。

遺体を埋葬した施設（主体部）は見つかりません。

墳丘の裾部には幅2～3m、深さ1m前後の溝が巡ります。堆積状況から、この溝は、きわめて短期間に埋没したことがわかりました。

また、墳丘斜面から裾部にかけて多数の埴輪片が見つかりました。このことから、埴輪を並べたテラスが設けられていたことが推定されます。

とじておきましょう。



埴輪片の出土状態

埴輪について

埴輪には、古墳全体を周囲から区画するために立て並べられる土管のようなかたちをした円筒埴輪と、人物や家・馬などをかたどった形象埴輪があります。

本古墳の埴輪は、墳丘の斜面から裾部の溝跡にかけて破片となって出土しました。この出土状態から、本来墳丘上のテラスに並べられていた埴輪が、後世に転落したものと考えられます。

円筒埴輪は、主に後円部から出土し、人物や家・馬などの形象埴輪の多くは、前方部より出土しました。これらの形象埴輪の中には、へら状工具によって三角形の文様を描くものや、朱で文様を描くもの、部分的に赤く塗られたものなどが見つかっています。



形象埴輪片出土状態



円筒埴輪片出土状態



昭和23年調査のトレンチ確認状況（中央溝状）



神谷作101号墳周辺出土の馬鐸（個人所蔵）



埴輪男子胡坐像（天冠をつけた埴輪）

頬紅をつけた端正な顔立ち、美豆良^{注1}を長く垂れ、7つに枝分かれした鈴付きの冠をつけ、玉飾りの大刀を下げてあぐらをかく姿は、首長の葬送に際して、威儀をただす若き後継者の緊張した様子がうかがえます(上写真)。

まとめ

神谷作101号墳は、後世に大きく削平を受けているものの、古墳を厚く覆っていた砂を取り除くと、やや硬い白色の砂でできた古墳は前方後円墳を呈し、周囲に幅の広い溝が巡っていることが判明しました。前方部斜面からは昭和23年調査のトレンチが確認され、「天冠をつけた埴輪」などが出土した場所をほぼ特定することができました。付近には人物や家・馬など多くの形象埴輪片が出土しています。

埴輪の配置については、前方部では形象埴輪、後円部では円筒埴輪が主に出土しており、前方部と後円部の埴輪の種類が明確に区別されることが確認されたことは特筆されます。

神谷作101号墳の周辺には、牛転古墳群・大志田古墳群・沼ノ内古墳群、装飾横穴である中田横穴・餓鬼堂横穴群・腰巻横穴群のほかに、豊富な副葬品を有する八幡横穴群や白穴横穴群などが群在し、市内でも古墳や横穴が濃密に分布することから、古墳時代において、政治的に重要視された地域であったといえます。

なかでも、本古墳は豊富な種類の埴輪群を有しており、この地区の中心的な古墳のひとつとみることができます。当地方の古墳時代を研究するうえで新たな知見をもたらす大きな成果が得られたものと考えています。

(4) 注1) 古墳時代の男子の結髪の名。角髪、総角とも。結んだ下端が肩に垂れたもの（下げ美豆良）と、耳のあたりに小さくまとめたもの（上げ美豆良）がある。下げ美豆良は正装男子像に多くみられ、上げ美豆良は農夫像などにみられる。